



# HO2 ルル

担当カラー：緑

## 共通情報

### ・フローランダ

四季の移ろいが美しい国。

### ・イルム

フローランダにある大きな都市の名前。商業が盛んで、いわゆる都会。

### ・クレール

イルムから東に向かったところに位置する小さな町の名前。自然豊かで、いわゆる田舎。

### ・<sup>くすし</sup>薬師とは

この世界の薬師は患者を診察し、適切な薬を処方する。

現代でいう医師と薬剤師を兼ねた職業だ。

どの薬屋にも独自の調合書があり、口外しない決まりになっている。薬屋は薬草園を所有し、薬草の品質保持のため庭師を雇うことが必須である。

### ・庭師とは

この世界の庭師は植物の専門家であり、庭の管理を行う職業だ。

一般家庭や公共施設の庭園管理が主な職場だが、薬草管理資格を持つ者は薬屋に勤めることができる。

## 『薬屋リーファ』

フローランダの中心部にはイルムという大都市があって、その東に位置するのが小さな町・クレールだ。

自然豊かなその場所が、私の故郷。

両親はこの町で『薬屋リーファ』を営んでいた。

決して大きくはないけれど、代々受け継がれる老舗の薬屋は、評判がよかった。

父が薬師、母が庭師だったので、忙しい両親に代わって幼いころから家事をしていた。

それを大変だと思ったことはないし、さみしいと思ったこともない。

母が料理上手だったから、料理は自然と覚えた。

休憩時間になると父が私を抱きしめてくれて、休みの日には薬の作り方を教えてくれた。

そして、食事をするときは、みんなで食卓を囲む。

「今日の料理、ルルが作ったのか？」

「そうよ。お母さんにおそわったの」

「ルルはのみ込みが早いから、教えがいがあるのよ」

「うん。おいしいよ。ルルはすごいなあ！」

両親の褒め言葉に、胸がくすぐったくなる。

いつも私のことを気にかけて、大事にしてくれる両親が大好きだった。

## 秘密

父に教わりながら初めて作った薬は、頭痛薬。

未熟だからと誰かに使うことはできなかったけれど、道具を使い、薬草を用いて、作りあげたあの感動を私は忘れられなかった。

いつか自分が作った薬で、誰かを助けられるようになりたい。

そう、町の人たちに慕われている父のように。

「私もお父さんみたいな薬師になりたい」

大きくなった私は、父の前で将来の夢を口にした。  
喜んでくれると思った、歓迎してくれると思った。  
けれど、父はほんの少しだけ複雑そうな顔をしている。  
しばらくの沈黙のあと、初めて見る真剣な顔で父は言った。

「本気なんだな？」

「ええ。本気よ」

「わかった。じゃあ、こちらへ来なさい」

父のあとをついていくと、そこは調薬室だった。  
毒草があるから絶対に入ってはいけない、と小さいころから言いつけられていた部屋。  
重厚な錠前がかけられているところが、父の手によって開かれる。  
そして目隠しをするように布がかけられた棚から、植木鉢を取り出した。

「それは？」

「魔法の植木鉢だ」

「ま、ほう……？ なにを言ってるの、お父さん」

魔法なんておとぎ話や本の中で出てくるものだ。  
でも、父の顔は相変わらず真剣で、それが冗談ではないのだと物語っていた。

「大昔、世界には魔法があふれていたらしい。でも奇跡の力はどんどんと失われ、今ではこの世界の誰一人として魔法を使うことはで

きない。魔法があったことさえ覚えていない。けれど、この植木鉢のように、魔法がかけられた物が残されていることがある」

「とても信じられないけれど……、この植木鉢にはどんな魔法がかかっているというの？」

「魔法の花が咲くんだ。そしてその花は、万能薬になる」

万能薬は、どんな病でも治せる薬のことだ。

本当にそんなすごい薬が存在するの？

けれど、父が取り出したガラス瓶を見て、疑問は解けた。

少しだけ光を放つ水薬。

これは、人智を超えたものだと一目でわかるものだった。

「花は数十年に一度しか咲かないんだ。周期もばらばら、俺たちが読めるものじゃない。そして、花卉は五枚。一枚につき一本だ」

「数十年に助けられるのは五人まで……」

「ああ、あまりにも少ない。だからこの植木鉢のことも、この薬のことも、絶対に口外してはいけない」

しかも、その薬をいつ、誰に使うのかは私たちが決めなければならない。

今、手元にある薬は二本だけ。

次に花が咲くのは何年先かもわからない。

これが、薬屋リーファに代々伝わる秘密なのだと、父は言った。

## 薬師として認められた日

薬屋リーファの薬師になるということは、この秘密を抱え、向き合い、適切に万能薬を使っていくということ。

「本当は、ルルにこの責務を背負わせたくはなかったんだ」

「……お父さん。でも、私、それでも薬師になりたいと思ったわ」



「ルル……」

「お父さんが笑顔にしてきた患者さんたちを知っている。私はそんなお父さんが誇らしいの。だから、一緒に薬師をやっていきたい」

まっすぐに父を見つめて告げると、父の目から涙がこぼれた。  
こうして、私は父の指導のもと、薬師としての勉強をはじめたのだった。

「ねえ、お父さん。あの入本当に頭痛だけなのかしら」

「どうしてだ？」

「目の奥も痛そうにしてるのよ」

「え？ そんなこと診察でも言ってなかったが……」

けれど、父は私の違和感を見過ごさず、再診察をすると目が病の原因であることがわかった。

「ルルの目はすごいな」

手放しに褒められて、それが私の自信になっていった。  
座学、実践、診察、調薬、目まぐるしく日々が過ぎていく。  
経験を積み、少しずつ薬師としての実力を身につけていった。  
そして、私が二十歳になるころ、父から認められる薬師となった。

「ルル。もう立派な薬師だ。これからリーファの薬師としてがんばろう」

父に頭をなでられ、母のご飯でお祝いしてもらった。  
私は、この日を一生忘れないだろう。

## 両親と決意

それは、本当に突然の報<sup>しら</sup>せだった。

遠い町の患者へ薬を届けに行く途中で、両親が事故に遭って、亡くなった――。

大雪が降る日のことだった。

報せを受けたあと、万能薬を持って両親が運ばれた薬屋へ駆け込んだけれど、もう、息を引き取ったあとだった。

万能薬は生きている者にしか効かない。

どうして、なぜ。

窓の外は今もまだ雪が降り続いていて、私の声はどこにも届いていないようだった。

もっと父の右腕となって診察を行い、母と一緒にキッチンに立ちたかった。

私の料理を食べてほほえむふたりを見たかった、もっと――もっと、ふたりに恩返しがしたかった。

後悔が、まるで大河のように流れ込んでくる。

それなのに……！

万能薬の瓶を振りかざして――止めた。

手の中で、薬が淡く光り輝いている。

これは誰かの命を救うもの。

私が今これを割ってしまったら、それこそ、薬師失格だ。

涙を拭った。

両親はもういない、けれど、遺してくれたもの、託してくれたものがある。


私にできることは、薬屋リーファを継ぐことだった。

葬儀を済ませたあと、私は庭師協会へ手紙を書いた。

薬屋の経営には庭師が必須だ。


庭師だった母の後任を雇う必要がある。

庭師は住み込みで働くことが多く、今回もきっとそういう契約になるだろう。



魔法の鉢植え、万能薬のことがあるから、外部の人を雇うのは気が重いけれど。

どんな人が来るだろうか……そんな不安を抱えながら、一週間が過ぎていった。





## キャラクターのまとめ

- ・ ルル (22)
- ・ 一人称 / 私 二人称 / あなた
- ・ 薬屋リーファの若き店主であり薬師である
- ・ 性格は真面目で責任感が強い
- ・ 薬師を選んだ理由は、父のように薬で人々を救いたいと思ったから
- ・ 鋭い観察眼を持っており、患者の変化を見落とさない、人々を支える薬師という仕事に真摯<sup>しんし</sup>に向き合っている
- ・ 魔法の植木鉢、万能薬という秘密は常に頭の片隅にあり、重責を背負っている
- ・ 丁寧な診察で的確な処方ができ、気さくな性格で人々に慕われる父を尊敬している
- ・ 上品な口調は母親似、料理が上手で花をきれいに咲かせることができる母が大好きだった
- ・ 自分の作った料理をみんなで食べる時間が好きだった
- ・ 両親の死から一か月が経過している
- ・ クレールの小さな学校に通っていたころ、好きになった男の子がいたが思いを伝えることなく卒業、それ以来、恋愛経験はない
- ・ 好きなものは調薬と焼菓子（クッキーやマフィン、ケーキなどさまざま）
- ・ 苦手ものは虫（子どもころに手を刺されてぱんぱんに腫れたことがあるため）
- ・ 趣味は料理（調薬で細かな計量をしているのでお菓子作りも得意）

## 話したくないこと

- ・ 魔法の植木鉢のこと
- ・ 万能薬のこと